

[論文]

汝の妻も世の女なるべし

—米軍統治下愛楽園に結成された婦人会—

鈴木 陽子（沖縄愛楽園交流会館）

はじめに

1950年、米軍統治下沖縄におけるハンセン病療養所国頭愛楽園（1952年に琉球政府立となったときに沖縄愛楽園と改称、以下、愛楽園）の自治組織「共愛会」内に婦人会が結成された。本稿は婦人会を結成した女性たちが園外の人々とつながり、婦人会事業として美粧院を立ち上げた意義を明らかにする。

自治会が所蔵している『1951.4. 婦人会日誌』（以下『日誌』）には濃密な活動記録が記されている⁽¹⁾。ところが、1950年に結成したとされる⁽²⁾この婦人会は活動期間が8年と短かったためか⁽³⁾、当時、在園していた人でも婦人会について記憶している人は少ない。しかし、「婦人会のことは分からないねえ」「教会には婦人会があったけど」と語る女性たちのなかには、戦後の園復興期の暮らしについて、園内に開店した「パمام美粧院」でかけたパーマのことや米軍の公衆衛生福祉部長ロルフ・フォン・スコアブランドが開催させた「オープンショー」について具体的に話をする人がいる。また、女性たちに配給された生理用品について話す人も、敬老会で披露した余興や準備したご馳走作りの話をする人もいる。語り手たちは意識していないが、これらはどれも婦人会が1951年に取り組んだ事業である。そこから、本稿では1951年に焦点を合わせて、婦人会の活動を考察したい。

1. ハンセン病療養所の女性たちについての研究

ハンセン病療養所の人々についての研究はこれまでに数多くある。そのなかで、入所者の組織的な活動については、各療養所の自治会や全国ハンセン氏病患者協議会・全国ハンセン病療養所入所者協議会自身による記録があり、また、天田城介や松岡弘之⁽⁴⁾による園外の人々とつながる自治会結成や運動についての論考がある。また、有蘭真代や金貴粉にみられるように、療養所内の不自由な人々や外国籍の人等、園内のマイノリティの組織化・運動について、自治会の運動との関係を論じた研究などもある⁽⁵⁾。これらの論考では男性を中心とした療養所の入所者の活動が描かれている。

療養所の女性たちの研究については、2001年の「らい予防法」違憲国家賠償請求訴訟判決後に取り組まれてきた在園者の聞き取りのなかに女性たちの語りがあり、沖縄愛楽園自治会が発行した『沖縄県ハンセン病証言集沖縄愛楽園編』にも女性たちの語り数が数多く収録されている。さらに、福西征子や山本須美子・加藤尚子による療養所の女性入所者に焦点を合わせた研究もある。これらは従来、男性によって語られてきた療養所の生活世界のなかで、女性たちがどのような経験をしてきたのかを聞き取り、結婚や堕胎についても記述している⁽⁶⁾。また、金貴粉は在日の女性入所者が園内でパーマを行うことを模索してパーマ作業を患者

(1) 南真砂子『1951.4. 婦人会日誌』（沖縄愛楽園自治会所蔵、1951年）。

(2) 1952年発行『愛楽誌』「一九五〇年諸統計表」内の「本年中に於ける主要行事」に1月10日愛楽婦人会結成、1月14日婦人会幹部辞令伝達式と書かれている。

(3) 沖縄愛楽園共愛会『1957年評議委員会議事録』（沖縄愛楽園自治会所蔵、1957年）。

(4) 天田城介「戦時福祉国家化のもとでのハンセン病政策—乞食労働、都市雑業労働の編成」（天田城介・角崎洋平・櫻井悟史編『体制の歴史—時代の線を引きなおす』洛北出版、2013年）。松岡弘之『ハンセン病療養所と自治の歴史』（みすず書房、2020年）。

(5) 有蘭真代『ハンセン病療養所を生きる—隔離壁を砦に—』（世界思想社、2017年）。金貴粉『在日朝鮮人とハンセン病』（クレイン、2019年）。

(6) 福西征子『ハンセン病療養所に生きた女たち』（昭和堂、2016年）。山本須美子・加藤尚子『ハンセン病療養者のエスノグラフィー「隔離」の中の結婚と子ども—』（医療文化社、2008年）。

作業に位置づけさせ、園外の人々の支援を得て店舗化しただけでなく、他園にパーマ技術を広げていった行動について論じている⁽⁷⁾。しかし、これらの研究は、生活世界としての療養所における女性たちの経験を記述し、その個々の女性の経験と療養所内の組織的活動との関わりについて明らかにするものではない。また、これまで、患者作業については、少ない職員の代わりに低賃金で患者を働かせて園運営を成り立たせる構造について論じられてきた。しかし、療養所の生活を支えてきた賃金の支払いのない諸々の作業について、患者作業との関係から論じた研究はみかけない。

愛楽園においても、女性の行動を入所者の組織的な活動との関わりから記述されることは少ない。婦人会の活動についての記述は証言集⁽⁸⁾内で語られている2名と、園発行の50周年記念誌⁽⁹⁾に婦人会活動を掲載したもののほかに見当たらず、短期間組織されていた婦人会について研究したものはない。

沖縄の女性史については、伊波普猷のように民俗学の視点から沖縄の祭祀における女性像が書かれる傾向があったのに対して、近年、『沖縄県史各論編第八巻女性史』⁽¹⁰⁾にみられるように、女性が沖縄の文化を担ってきた一方で、その生き難さの中でどのように行動してきたのか、ジェンダーの視点を明確にした研究が進んでいる。そこでは遊郭に売られた女性たちや戦後の性産業で生きてきた女性たちも、沖縄社会で生きてきた女性たちとして描いている。しかし、ここでも愛楽園で暮らす女性たちのように、社会から隔離された女性たちを沖縄の女性史の中に位置づけることはなかった。後述するが、隔離政策の厳しい制約下でありながら、愛楽園の婦人会には園外とのつながりを作りながら生き抜いてきた女性たちがいた。

それは園外の一般社会と同じように、米軍統治下沖縄の社会を形成する人々の暮らしの一つである。

本稿では、近年の沖縄女性史の成果を視野に入れながら、美粧院を開店させた婦人会の事業を愛楽園におけるペイドワークとアンペイドワークの観点から考察する。調査は愛楽園在園者からの聞き取りのほか、『沖縄県ハンセン病証言集愛楽園編』、『1951.4. 婦人会日誌』、自治組織である共愛会が作成した議事録等の自治会所蔵資料、入所者の短歌帳などを資料とする。

2. 1950年代はじめの愛楽園をめぐる状況

1) 共愛会による園復興と運営

戦後の愛楽園の婦人会は1950年に誕生し1957年度末に解散した。まず、婦人会が結成された1950年代初めの愛楽園の状況を概観したい。米軍統治下沖縄でも隔離政策は続き、園外で暮らしていた患者は沖縄戦で壊滅状態になった愛楽園に収容された⁽¹¹⁾。また、1946年に台湾の療養所楽生院から沖縄出身者が引き揚げてきたのをきっかけとして、1947年には星塚敬愛園を中心に本土療養所から218人が引き上げてきた。その後、「戦争らい」といわれるハンセン病発症者は増加し、1948年に久米島収容、1949年に八重山収容が行われて、医薬品はもちろん衣食住も不足する愛楽園の入所者数は900名を超えた。また、本土出身の医師・看護師は本土に引き上げていった⁽¹²⁾。1951年末現在、入所者919人に対して医師は園長の他3人にすぎず⁽¹³⁾、この3名は義務制で着任した医師であり、翌年には離任した⁽¹⁴⁾。その中で、入所者は1947年、規約を持った自治組織共愛会を結成した。共愛会は会員である入所者を統制して壊滅状態に

(7) 金貴粉「ハンセン病療養所における在日朝鮮人女性」(『国立ハンセン病資料館研究紀要』第7号、国立ハンセン病資料館、2020年)。

(8) 沖縄県ハンセン病証言集編集総務局『沖縄県ハンセン病証言集沖縄愛楽園編』(沖縄愛楽園自治会、2007年) 321-322頁、337-338頁。

(9) 国立療養所沖縄愛楽園『開園五十周年記念誌』235-239頁。

(10) 沖縄県教育庁文化財課史料編集班『沖縄県史各論編第八巻女性史』(沖縄県教育委員会、2016年)。

(11) 天久佐信編『開園30年記念誌』(沖縄愛楽園、1968年) 43頁。

(12) 沖縄愛楽園自治会『命ひたすら一療養50年史』448-449頁。

(13) 国頭愛楽園『愛楽誌』(沖縄愛楽園、1952年) 8頁。

(14) 前掲、国立療養所沖縄愛楽園『開園五十周年記念誌』113-114頁。

なった療養所を復興し、自給自足の療養所を運営した⁽¹⁵⁾。

共愛会による園復興は1949年に軍政府公衆衛生福祉部長に就任（～1952年）したスコアブランドに支えられた。スコアブランドは軍をとおして空だった倉庫に医薬品を運び込んだほか、建築資材、衣料品、食料など必要なあらゆるものを患者地帯にある浮き桟橋から直接陸揚げした⁽¹⁶⁾。また、行く先々で愛楽園入所者への寄付を仰ぎ、物不足の愛楽園入所者のもとに運び込んだ。また、1949年からプロミンの治療も可能にした⁽¹⁷⁾。

婦人会はスコアブランドが大量の資材を愛楽園に運び込み、共愛会が園の復興・運営を強力に推進しているときに、共愛会文化部内の一団体として結成された⁽¹⁸⁾。

2) 愛楽園の文芸同好者を訪ねる『文芸サロン』同人

愛楽園では1938年の開園時から職員の指導で短歌・俳句などを作る人が機関紙『済井出』⁽¹⁹⁾に投稿し、文芸誌を作っていた。また、戦後、本土療養所から引き揚げてきた人にも文芸活動をする人がいた。戦前から愛楽園にいた文芸同好者と戦後、「療養所民主化、人間復活の手土産を持って民主丸に乗って日本台湾各療養所から引き揚げてきた文芸同好者」が合流し⁽²⁰⁾、短歌愛好者たちは1947年に会合を開き、第1回短歌会が開催された。開園時から短歌や俳句を作り始めた初代婦人会会長も、この第1回短歌会に参加し、そこに出した歌は参加者の好感を得た⁽²¹⁾。

一方、戦後、沖縄では1949年に『月刊タイムス』『うるま春秋』が発行され、文芸作品を公募して入選作品の掲載を開始した。ここに若い文芸人が登場し、沖縄における戦後初の文芸同人結社『文芸サロン』が結成された⁽²²⁾。また、戦前、小説を書いていた新垣美登子も、再び、作品を発表し始めた⁽²³⁾。愛楽園の文芸同好者も教職員会募集の戯曲に太田三郎が「加那米」を投稿して入選し、1950年には『月刊タイムス』の沖縄戦記録文芸募集に宮良保の「無血の島」が入選した。さらに『うるま春秋』に宮良保の「神の使者」と国本稔の「虹色の蟹」が入選した。愛楽園の文芸同好者も、『文芸サロン』の同人である呉我春夫、山田みどり、冬山晃、嘉陽安男、大城立裕等に伍して沖縄文壇に登場した。このつながりから、沖縄内外で活躍する作家や歌人、俳人が入所者の居住区に文芸同好者を訪ねるようになり、その後、彼らは共愛会（後の自治会）文化部編集の機関誌『愛楽』や機関紙『すむいで』⁽²⁴⁾に投稿される文芸作品の選者を務めることになった。「愛楽文芸は彼らの激励指導を受けて洋々たる流れ」となり、「愛楽文芸が療養所文芸だけに惰さないで、一つの壁を破って人間復活文芸の封建制を押し流して流れ出した」⁽²⁵⁾のである。

婦人会が結成された1950年代初めは、愛楽園の文芸同好者が園内外で活躍し、園外の作家たちが園内の文芸同好者を訪ね活動した時期である。この頃、『文芸サロン』の一員として愛楽園を訪ねた山田みどりは『うるま春秋』に入選し、その後うるま新報の記者に転身した仲地（外間）米子で

(15) 沖縄愛楽園共愛会『一九四七年八月一日制定一九四九年十二月一日改訂一九五三年九月十五日改訂沖縄愛楽園共愛会々則』（沖縄愛楽園自治会所蔵、1957年）。

(16) 1951年に入所した入園者は「職員側に置くと、職員が外に持ち出してしまわれてしまうからって、スコアブランド先生は直接浮き桟橋から患者のところを持ってきた」という。

(17) 前掲、天久佐信編『開園30年記念誌』47頁。

(18) 沖縄愛楽園共愛会『一九五三年九月十五日制定沖縄愛楽園共愛会事務細則』（沖縄愛楽園自治会所蔵、1953年）。

(19) 『済井出』は1938年9月から1940年11月まで国頭愛楽園慰安会が発行した機関紙。

(20) 友川光夫「(戦後) 園内文芸誕生から今日まで」(『愛楽』文芸特集号、沖縄らい予防協会、1960年) 79頁。

(21) 松並一路「「あとがき」と「愛楽短歌会ノート」」『地の上』（愛楽短歌会、1980年）271-272頁。

(22) 大城立裕「文芸サロン」(『沖縄大百科事典下巻』沖縄タイムス社、1983年) 403頁。

(23) 由井晶子「戦後の女性作家たち—新しい表現の模索」(『沖縄県史各論編第八巻女性史』沖縄県教育委員会、2016年) 169頁。仲村渠麻美「新垣美登子「未亡人」論—1950年代沖縄の新聞における「戦争未亡人」表象をめぐる抗争」『琉球アジア社会文化研究』第14号（琉球アジア文化研究会、2011年）41-77頁。

(24) 1974年～2001年まで発行された自治会編集の機関紙。

(25) 前掲、友川光夫「(戦後) 園内文芸誕生から今日まで」80頁。

ある⁽²⁶⁾。また、新垣美登子も1951年に愛楽園の婦人会を訪ねている⁽²⁷⁾。彼女は一高女時代には伊波普猷らが1916年に設立した沖縄組合教会に集い、男性知識人サークルに参加し恋愛と結婚の自由を標榜した「新しい女」といわれた一人である⁽²⁸⁾。小説家として活躍したが、東京の美容学校、マリー・ルウキズ美容女学校（現マリー・ルイズ美容専門学校）で学び、沖縄の美容師第1号として1930年に那覇で「うま美粧院」を開店した。戦後は那覇の平和通りで「みと美粧院」を経営し、戦前と同じように美容組合長を務め、新聞に連載小説を書いた⁽²⁹⁾。山田みどりとは新垣美登子は愛楽園の婦人会が美粧院を開店させる際には、婦人会のもとを何度か訪ね、美粧院開店を支援した。両者と婦人会のつながりについては第5節「美粧院を開店した婦人会」の項で述べたい。

3) 文芸で自己表現した女性入所者

次に戦前・戦後の愛楽園で暮らす女性たちの行動について概観したい。愛楽園の『昭和十三年年報（開園第1年）』の「国頭愛楽園慰安会の概況」欄に、学芸の奨励として「入園者に対し時々懸賞の下に文芸作品を募集し又琉歌俳句の講座を催し努めて其教養をはかりつゝあり。尚隨時文芸、工芸、廃物利用の展覧会を開催しその道の奨励に努めつゝあり。」⁽³⁰⁾と記されたように、機関紙『済井出』には第1巻第3号（1938年11月1日発行）から「済井出文芸」欄が設けられ、詩のほか琉歌が掲載された。その後、1939年3月1日発行の同紙第2巻第3号には「済井出文芸」に済井出歌壇、済井出俳壇が作られ、それぞれを指導していた看護婦長が園三千代、園長が琉球男を名乗って

選者となり、入所者の作品が掲載された⁽³¹⁾。1940年には文芸部を組織し（～1944年）、ガリバン刷りの文芸誌「くろとん」「布備瀬」「済井出」が発行された⁽³²⁾。そこに掲載された作品には初代婦人会長をはじめ幾人かの女性の名前がある。文芸活動には女性の参加があり、機関紙・誌に掲載という評価を受けた。また、入所前に教員をしていた女性は1941年、園内で暮らす「子どもたちには本で教えましょうよ」と提言して子どもたちを教え、愛楽園の教室を作り教育体制を作った⁽³³⁾。

園内の文芸や教育において女性たちの活躍はあったが、園内の生活で女性が考えを主張し行動する場面は限られた。1938年に開園した愛楽園では、住民の迫害と闘い療養所設立に向けて動いてきた人々と、開園時に強制的に収容されて園に不満を持つ人々の間に対立があった。不満を持つ人々は食事の改善、家族援護、恋愛の自由を求め、そのなかには、男女の風紀取り締まりを園長に進言したと思われた入所者の住居に投石した人がいた。ここには男性と一緒に行動した女性もいた⁽³⁴⁾。その後、園に不満を持つ人々が中心になって一心会が結成され、そこで行われた患者作業のストライキ時には女性も従った⁽³⁵⁾。しかし、表立っては女性が一心会の意思決定過程に関わることはなかった。愛楽園開園式前の1938年10月に入所した女性は、一心会での議論に「女の人何かいうなんて滅相もないですよ」と女性が園内の動静に発言することはなかったと語った⁽³⁶⁾。女性に政治能力がないとされ、選挙権がなかった時代には、園内でも女性が発言することはありえないことだった。のちに婦人会長になった南真砂子は、自発的な行動をしたため、男性に何度も引っ張り

(26) 前掲、由井晶子「戦後の女性作家たち—新しい表現の模索」168頁。

(27) 前掲、南真砂子『1951. 4 婦人会日誌』。

(28) 伊藤るり「モダンガール現象と女たちの新しい卓越感覚」（『沖縄県史各論編第八巻女性史』沖縄県教育委員会、2016年）179-183頁。

(29) 新垣美登子『哀愁の旅』（松本タイプ出版部、1983年）。

(30) 国頭愛楽園「国頭愛楽園慰安会の概況」（『昭和十三年年報（開園第1年）』国頭愛楽園、1939年）34頁。

(31) 国頭愛楽園慰安会『済井出』第1巻第3号—第3巻第2・3・4合併号（国頭愛楽園慰安会1938-39年）。

(32) 前掲、松並一路「『あとがき』と『愛楽短歌会ノート』」267頁。

(33) 前掲、沖縄県ハンセン病証言集編集総務局『沖縄県ハンセン病証言集沖縄愛楽園編』312頁。

(34) 清水寛「日本ハンセン病児問題史研究〔Ⅱ〕」（『埼玉大学紀要 教育学部（教育科学）』第48巻第2号、埼玉大学教育学部、1999年）79頁。

(35) 前掲、沖縄愛楽園自治会『命ひたすら—療養50年史』101頁。「入所者作業人は一人も働いてなく」と記述されている。

(36) 2014年4月聞き取り。

出された経験を次のように語っている⁽³⁷⁾。

何回も引っ張りだされたよ、男の人たちに。それで一回は、ここに納骨堂建立するとき(一九四〇年)によ、服部団次郎という牧師がね、東京に資金を集めに遊説にいつているわけ。したら私はね、空き缶とか拾って売ってから、このお金を納骨堂の資金に献金したわけさ。それで中の男の人たちに、「男がもしないことを、お前がするねー」って言って引っ張りだされたよ。寮の前でたき火して、大勢の男の人たちが集まっている所に。引っぱり出されて叱られた。【()は原文ママ】

女性が従来にはない新しい取り組みを、自分で考え実行することは認められなかった。女性は公の場で発言するものではないとされていた社会で、女性が後ろ向きにならずに活動できたのは文芸活動だった。それは園内でも園外の一般社会でも同じだった⁽³⁸⁾。

また、沖縄でも1904年に愛国婦人会、1930年には国の軍事・経済政策に家庭にいる女性を動員することをねらいとした大日本連合婦人会、1933年から「思想対策」をねらいとして村内国防婦人会が設立されるようになった。さらに、この3団体は「国策に即応する国民運動の婦人部隊として、全日本の大同団結」が図られ、1942年に大日本婦人会に統合された。婦人会は軍事増強を目指した「銃後の守り」の働きをするように組織された⁽³⁹⁾。

戦時体制下の婦人会結成の動きは愛楽園も無縁ではなく、開園から1年たった1939年10月2日、「愛楽婦人会発会式」が挙行され⁽⁴⁰⁾、機関紙『済

井出』には10月9日、10日、「県立第一高等女学校教諭ヲ内タマ子女史ヲ招聘シ二日間ニ亘リ愛楽園婦人会ヲ中心ニ手芸講習会開催一同大喜ビ」と記された⁽⁴¹⁾。一方、戦後、婦人会を立ち上げた南は戦前の婦人会とは異なる団体として、「婦人会というちゃんとした形しとったものではないけど、なんといつか、女子青年団というのがあって。戦争中はもう軍国主義一色だから、奉仕作業をするために」女子青年団があったと語った。愛楽園の青年団は1939年に結成され、園内の働き手として重視された。戦時体制が強化されていく中で、愛楽園には愛楽園患者食糧増産挺身隊が組織された⁽⁴²⁾。子どもたちも「愛楽挺身隊」・「子供挺身隊」ののほりを立てて働いた⁽⁴³⁾。出征することのない入所者たちに園長は戦意高揚の訓示を行い、陸軍中将渡辺正吉らも園を訪れ戦意高揚を熱く語った⁽⁴⁴⁾。園外の社会では、婦人会をとおして既婚女性は大日本婦人会に組織され、学校を卒業した結婚するまでの女性が挺身隊として徴用されたり、軍需工場などで働いていた⁽⁴⁵⁾。男性が出征することのない園内でも、若い女性入所者は働き手として女子青年団を組織し、奉仕作業をした。

3. 婦人会の立ち上げ

戦後、療養所の人々も選挙権を行使できるようになり、沖縄では1945年に女性も選挙権を得た⁽⁴⁶⁾。愛楽園では1944年6月3日に園長が総代を指名して入所者を組織させた翼賛会自治会が、翌年8月3日、入所者の選挙で総代を選ぶ自治制の翼賛会に変わり、1946年9月26日に翼賛会から共愛会の名称を改めた。その後、1947年5月13日に本土療養所から218名が引き揚げてきた後、規約を備えた入園者自治会である共愛会となった。共

(37) 前掲、沖縄県ハンセン病証言集編集総務局『沖縄県ハンセン病証言集沖縄愛楽園編』322頁。

(38) 勝方＝稲福恵子は沖縄県史女性史編のなかで、女子教育により女性が書物を読み、書いて表現する主体として登場したことを論じている。勝方＝稲福恵子「読む女・書く女」の出現―口承から書承へ(『沖縄県史各論編第8巻女性史』沖縄県教育委員会、2016年)145-149頁。

(39) 那覇市総務部女性室那覇女性史編集委員会編『なは・女のあしあと―那覇女性史(近代編)』(ドメス出版、1998年)403-422頁。

(40) 国頭愛楽園『昭和14年年報(開園第2年)』(国頭愛楽園、1940年)8頁。

(41) 国頭愛楽園慰安会「愛楽日誌」『済井出』第2巻第10.11.12号合併号(国頭愛楽園慰安会、1939年)

(42) 前掲、沖縄愛楽園自治会『命ひたすら―療養50年史』447頁。

(43) 前掲、沖縄県ハンセン病証言集編集総務局『沖縄県ハンセン病証言集沖縄愛楽園編』313頁。

(44) 沖縄県ハンセン病証言集編集総務局『沖縄県ハンセン病証言集資料編』(沖縄愛楽園自治会、2006年)468頁。

(45) 1944年制定の女子挺身動労令による。

(46) 沖縄県沖縄資料編集室『沖縄県資料戦後1 沖縄諮詢快記録』(沖縄県教育委員会、1986年)41頁。

愛会の総代の下に執行部内の役員と居住区ごとに役員を選出し、園の運営を行った⁽⁴⁷⁾。そのなかで、共愛会の役職に女性が就くのは居住区内にある寮の、女性寮の寮長のみだった。共愛会庶務部は入所者の可働状況を調査し、居住区や賃金が支払われる患者作業を割り振った⁽⁴⁸⁾。後に婦人会会長になった南は戦後、壊滅状態の愛楽園でどのような思いで暮らしていたかを次のように語っている⁽⁴⁹⁾。

戦争終わってからは130名くらいの炊事(係)。今は中央炊事になっているけれど、前は区ごとに分散してね、…(中略)…自給自足。炊くのも野菜を取るのも薪を取るのも全部自分たちで。…(中略)…アメリカカーがメリケンビカー(小麦粉ばかり)くれるから団子汁作って。団子汁だけでは食べれんから、饅頭作ってね。また、ビスケット4枚で一食にしたこともあったね。スコアブランド先生が来てからが、軍の物資をいろいろ入れてくれたからさ、初めてみんないろんなの食べて、プロミンを打つようになってる。そういう場合、私は故郷で果たせなかった夢を、ここで果たそうという気持ちがあったもんだから、いつも先頭でばりばり。5カ年間炊事場で働きづくめで。

南はこの炊事の患者作業をしていた時期に婦人会を立ち上げた。続けて婦人会の立ち上げについての南の語りをみていきたい⁽⁵⁰⁾。

戦後が、婦人会というのができたよ。…(中略)…組織つくってからよ。婦人会というのはいろんなのがあるさ。パーマヤーの誘致やら、精神病患者を浴びせたり(入浴させる)何したり。徹夜で看病しなければならない。病

気があったり。とにかく、一人の力では請求するのもできないけれどさ。大勢の力でならやりやすいさ。初めあんた、女の生理用品もなかったんだよ。その脱脂綿の請求やらなんやら。いろんなそういうものを組織してからが、なにしてる。それはもう。いろいろあるよ。

…(中略)…誰も組織つくらんのに。自分から真っ先にたって組織つくったわけさ。難儀してからの。自分たちの生活の発展のために。自分たちの生活を自分たちの手で勝ち取るためにやったわけさ。話しをするというよりか、何がいかということ聞いて。【()は筆者追記】

『日誌』によれば、南は1951年4月1日に自治組織である共愛会の総代から婦人会会長の辞令を受けている。共愛会の規約によれば婦人会は文化部に所属し、夫婦区、独身区、花園区乙女寮の女性を構成員にして居住区の寮ごとから班長を出した⁽⁵¹⁾。また、短歌会などの文化活動と同じように文化部からの補助金を活動費とし、1月300円の補助金を受けた⁽⁵²⁾。

南が記した『日誌』によると、第一回の婦人会総会が1951年4月20日に開催され、1年間に「成



開店当時のパマミ美粧院。空きスペースを求めて移動を繰り返した。『愛楽誌』1952年4月10日発行口絵写真。

(47) 前掲、沖縄愛楽園共愛会『一九四七年八月一日制定一九四九年十二月一日改訂一九五三年九月十五日改訂沖縄愛楽園共愛会々則』。

(48) 『一九五二年以降至五四、七迄 公文書類綴』(沖縄愛楽園自治会所蔵)。

(49) 前掲、沖縄県ハンセン病証言集編集総務局『沖縄県ハンセン病証言集沖縄愛楽園編』319頁。

(50) 沖縄県ハンセン病証言集編集総務局2007年3月6日聞き取り。

(51) 文書部『自一九四四年六月三日至一九五九年自治会役員名簿』(沖縄愛楽園自治会所蔵、1959年)。

(52) 共愛会会則には排球倶楽部や短歌会の規約が綴られているが、婦人会の規約は見当たらない。『日誌』には、4月20日に総会を開き、婦人会の事業について話されたことが記されている。

すべき事業並びに向上文化面」を協議した。そこでは、まず、事業として（イ）病室慰問を目的としてのど自慢の夕べをもつこと。（ロ）髪結いのこと。（ハ）一般不自由者の方達の布団の入れ替え。（ニ）不自由者寮の橘寮・芙蓉寮の繕いを続けること⁽⁵³⁾の4点が協議された。（イ）における病室は体調を悪化させた人が居住する寮舎を離れて病棟に入る病室であり、（ニ）の不自由者寮は視覚障害などで介助を必要とした人が暮らす寮である。（イ）で挙げられた病棟に入室している人たちへの婦人会の慰問とは別に、青年寮・乙女寮では次のように月一回不自由者寮への慰問が行われていた⁽⁵⁴⁾。

青年寮乙女寮では月一回不自由舎にも慰問しに行って、歌ったり踊ったりやりましたよ。飛んだり跳ねたりしてね。おじーおばーなんか、すごく喜んでくれたからこっちも嬉しいさ。私たちのことを子供や孫みたいに思っているからよ。今みたいに、社会からの慰問とかな時代だから、できることはいろいろやったんだよ。

このように定期的に一般不自由者寮の慰問を行っていた青年寮乙女寮で暮らす若い人々は、不自由者や病棟入室者、子どもたちが暮らす花園区で暮らし、日常生活の支援を必要とする人々の付添作業や子どもたちを含めた衣食住全般の仕事を担当していた。婦人会は居住区である不自由者寮とは別に、時々体調を悪化させて病棟に入室している人への慰問を事業として考えた。また、青年寮乙女寮の人々が患者作業で行う不自由者寮での付き添いの中には、繕いものや不定期な作業である布団の入れ替えは入っていなかった。それに対して、婦人会は事業に「タチバナ寮、ふよう寮のつくろいを続けること」をあげた。それまで不自由者の繕いをしていた人々がどのような立場に

あったのかは不明であるが⁽⁵⁵⁾、婦人会が組織される前から女性が担っていたと考えられる繕い作業が婦人会の事業に位置づけられた。1952年に発行された機関誌『愛楽誌』創刊号では、婦人会を入園者団体の一つにあげ、その仕事を「不自由者、病棟の繕い作業に従事」と記している⁽⁵⁶⁾。このように、賃金が支払われる患者作業の隙間にあり、奉仕として行われていた繕い等を、婦人会は事業に位置づけた。婦人会事業として協議された髪結いについては第5節で述べたい。

また、婦人会が行う事業の文化面として（イ）時間励行、出席整理を正す。（ロ）葬式に努めて出ること。（ハ）バレー、ピンポンの試合の件。（ニ）音楽の練習。（ホ）洋裁の件、手芸の件。（ヘ）月に一回以上婦人総会を開くこと。（ト）補助費の使用法の件。以上7点が協議された事項として『日誌』に記されている。

それまで女性たちが奉仕として行ってきた園内の仕事には、不自由者寮の人にかかわる事柄や、敬老会などのイベントにかかわる事柄があった。それらの奉仕として行ってきた活動を婦人会の事業と位置づけたほか、バレーボールやピンポンなどのスポーツや髪結い（パーマ）や洋裁等の装いを楽しむための企画も婦人会の取り組みとした。婦人会はこの後、美粧院の開店や洋裁講習、生理用品の確保やイベントの企画などを実現させることになるが、この第1回総会ですでに、美粧院、洋裁講習会につながる議論をしていた。『日誌』によると、婦人会会長は総会の翌日4月21日に総会での協議事項を共愛会総代に報告した。また、洋裁の外来講師を招聘するよう総代に依頼し、同月25日には洋裁や手芸の講習をするために講師依頼手続きをするよう「比嘉さんに依頼」した。『日誌』に書かれた「比嘉さん」が職員なのか誰かは特定できないが、1952年に戦後初めて発行された『愛楽誌』の編集者であり、検査室で助手の入所者とともに働いていた職員も比嘉である。

(53) 原文は「タチバナ寮、ふよう寮のつくろいを続けること」

(54) 前掲、沖縄県ハンセン病証言集編集総務局『沖縄県ハンセン病証言集沖縄愛楽園編』325頁。

(55) 現時点では、1940年代末に乙女寮や一般区にいた人からの明確な聞き取りができていないが、園内の友人や同郷の人々の手で行われたのではないかと語る在園者もいる。

(56) 『愛楽誌』の記述のように婦人会が1950年1月に結成されたのであれば、1950年事業を継続したといえる。前掲、国頭愛楽園『愛楽誌』156頁。

一方、会長南は第一回総会の翌21日には協議事項を実行するため、夫婦区の1～3区を回り、「婦人強化」のために各区の婦人常会を開くことを説き、24日には独身区の星の原区の婦人会班長に区婦人会強化を図ることを説いた。この仕組みは共愛会の仕組みと同じである。共愛会では居住区ごとに区長を選出し、寮長・班長が複数配置され区民の作業を進めた。また、区ごとに選出される評議員は常会で区内の意見を集約して評議委員会に臨んだ⁽⁵⁷⁾。婦人会も同様に区ごとに常会を開いて意見を集約し、作業を進めた。次節では『日誌』に基づいて1951年に行われた婦人会の事業実績を見ていきたい。

4. 1951年の婦人会の活動

婦人会は区ごとに作業を担い、まず、5月1日には夫婦区三区の婦人会が「たちばな寮、かやの修理物を」し、5月2日には独身区である星の原区の婦人会が「ふよう寮の蚊帳の修理を」した。この婦人会の活動について、1951年に入所して少女少女舎で暮らした男性は、日常生活の面倒をみていた寮父母のほかに「婦人会がありました」と語っている。「子どもたちの布団の入れ替えとかしてくれましたよ。あの頃、子どもも多くて60～70名くらいになっていたはずですよ、その布団」⁽⁵⁸⁾と、総会で協議されていた布団の入れ替えが婦人会の手で行われていたことを語った。

婦人会員である女性たちが婦人会の活動に対してどのように思っていたかを『日誌』から読み取ることにはできないが、4月24日に不自由者寮である「たちばな寮員一同様より婦人会に金百円寸志として戴いた」と書かれている。不自由者寮の人々は婦人会の事業を支持していたといえるだろう。

さらに、精神病棟に女性の入室者が出たときには各区から介護者を出した。8月11日に「精神病女患者入浴掃除に付き」幹事会を開き、「五人一

組で入浴掃除に当る。入浴掃除は一週間に一回とスル。タダシヨゴレタ場合は看護部長の指令により臨時にスル」との決議案がだされ、「磯浜区より着手スルコトになった」。8月21日には「精神病女患者の入浴並びに病室の清掃を磯浜区一班が」行い、この後、共愛会の支払日である月始めには文化部からの補助費300円とともに看護部からの謝礼70円を受け取った。その後も、1月30日に精神病棟に女性の入室があったため幹部会を開き、その日から独身区の月の里区婦人会から3名一組、一日交替で付き添いをするようになった。

通常の不自由者寮の付き添いや精神病棟、TB（結核）病棟、愛泉病棟などの病棟における付き添い作業は花園区の青年寮乙女寮の人たちが順番に担当していた。重労働の付き添い作業は夜寝るとき以外は働きづめとなり⁽⁵⁹⁾、病状によっては24時間付き添い作業をすることもあった⁽⁶⁰⁾。婦人会はこのような通常の青年寮乙女寮の人たちが行う作業からは漏れている、患者作業の隙間を埋める業務を担った。その中で付き添い作業については看護部から他の患者作業と同様に対価を得た。

これらの作業の一方で、婦人会は5月13日に行う「母の日」の慰安放送を企画・運営し、春と秋に3日間全園あげて実施されたバレーボール大会に婦人会として参加し、敬老会では敬老者に送るちゃんちゃんこを作り、ご馳走を用意し、当日は幕開けの「御前風」^{ぐじんふう}を含め6曲の舞踊を披露した。この2月4日に開催された敬老会の準備は年明け早々、1月5日から始めた。1月8日に婦人会では敬老会用の食事内容を相談し、旧正月（1月27日）前の1月25日に豚肉を塩漬けにし⁽⁶¹⁾、2月2日に菓子まんじゅうを作り、翌3日に星の原区の共同炊事場で料理をした。この時、婦人会から卵を225個を供出している。また、当日踊られた舞踊についても、1月13日には舞踊の演芸者に依頼をして20日からは連日けいこをした⁽⁶²⁾。

(57) 前掲、沖縄愛楽園共愛会『一九四七年八月一日制定一九四九年十二月一日改訂一九五三年九月十五日改訂沖縄愛楽園共愛会々則』。

(58) 2015年11月聞き取り。

(59) 沖縄愛楽園交流会館常設展示より。

(60) 前掲、沖縄県ハンセン病証言集編集総務局『沖縄県ハンセン病証言集沖縄愛楽園編』324頁。

(61) 各戸で食事の準備をしていた夫婦舎では、旧正月の食事準備をそれぞれ行っていた。婦人会の敬老会準備と各戸の旧正月準備を同時に行っていたと考えられる。

(62) 当時、舞踊や芝居を指導できる入園者のもとで居住区ごとに演芸が競われた。敬老会でも舞踊の指導が熱心に行われ、当日は青年寮の楽団や乙女寮のダンスも披露された。2014年12月聞き取り。

10月23日付の『日誌』には、園に様々な物資を運びこんでくるスコアブランドがラシャ地1,200ヤール、女性用の夏の服地753ヤールの生地を持ち込み、そのうち宮古南静園や当時米軍施政権下に置かれた奄美和光園に贈る生地も愛楽園の婦人会が服に仕立てると、共愛会総代から伝えられたことが記されている。その後、第一回総会で協議された洋裁の講習会が11月3日から始まり、半年の間に講習はワンピースから背広、下着などまで網羅した。おそらく、生地が送られてきたタイミングで講習は実施されたと考えられるが、11月9日に「洋裁講習 婦人ブラウスの原型の取り方」、11月10日に「午前、裁断、みしん講習、午後、ズボンの原型の取り方」が行われた⁽⁶³⁾。そして11月11日に「各区ミシン部より一名出席して礼拝堂で婦人ブラウス裁断して各区三枚宛配給、夜、総代と賃金、その他の相談」をし、翌12日には和光園と南静園あての縫物の賃金を評議員会で決定した。婦人会は翌日には、裁断とミシンの責任者を選出した。

共愛会はスコアブランドを通して大量の布地の寄付のほかにアメリカのシンガーミシン社からミシンの寄贈も受けていた。このミシンを使って縫い上げた服は、11月18日に開催した「オープンショー」で披露された。『日誌』によれば、このショーには「平良知事、ビットラー副長官御夫妻並びにアメリカのお客700名も来園。礼拝堂で洋裁並びに絵画の展覧会」が行われた。この時、服を縫った入所者はスコアブランドについて次のように語っている⁽⁶⁴⁾。

もう、たくさん布を寄付させて、アメリカの婦人会やなんやかんやから。そのころ、軍の払い下げのごわごわしたものとか、体に合わないのしかないでしょ。そんなの直して着けていたの。それが白い柔らかい生地でしょ。スコアブランド先生、縫わせた服をオープンショーで披露して、寄付した人たちを呼ぶの。寄付した生地がこんなになってますって見せ

て、もっともっと寄付してくださいって。見に来た人も寄付した人もこんなになっているんだって喜んで、また、寄付するの。

この時だけでなく、1950年にも2回ファッションショーが開かれたことが『愛楽誌』に記されている。スコアブランドは、入所者が寄付された品々を活用している状況を提示し、寄付が寄付を呼び込む仕組みを作ったのである。その後、婦人会は南静園と和光園に送る男性用のズボンと女性用のブラウスを縫い上げ、11月28日にはこれらを共愛会経理部に納品した。

ここまで述べてきたように、1951年の婦人会事業には共愛会文化部の補助金で運営する事業と作業に対価が支払われる事業があった。文化部の補助金で運営する事業としては、生活を楽しむ行事の企画・運営があり、そのほか、不自由者の繕いや布団の入れ替えなど患者作業の間隙を埋める作業も、同じように対価が支払われる患者作業には位置づけられていなかった。一方、不定期の病棟付き添い作業や臨時の縫製作業には患者作業と同じように対価が支払われた。婦人会が行った精神病棟付き添いは、患者作業に位置付けられた青年寮乙女寮の人々による付き添い作業と同じように対価を払うべき作業とされ、他の療養所に送る分も含めた服の仕立ても患者作業と位置づけられた。これらは婦人会が不定期な患者作業や臨時の患者作業を請け負う組織と位置付けられていたといえる。これらの婦人会事業は療養所内のペイドワークとアンペイドワークの状況の一端を表しているといえるだろう。

5. 美粧院を開店した婦人会

この節では、共愛会の規約に定められた患者作業の間隙を埋める作業をしていた婦人会が、美粧院を立ち上げて独自事業として運営した経過について述べたい。すでに述べたように、1950年前後の園内では文芸が盛んになっていた。戦前と同様に文芸活動には女性も参加し、1947年に結成され

(63) 4月25日に婦人会から依頼された洋裁講習が進展したかはわからないが、『日誌』には8月4日に「文芸サロン」と首里青年会を迎え、「乙女寮、婦人会の洋裁の講習権を首里青年社会奉仕部の方々に依頼スル」と記されている。南は洋裁講習も婦人会が主催したと語っている。

(64) 2015年6月聞き取り。

た短歌会に参加した14名のうち4～5名が女性だった⁽⁶⁵⁾。戦後初の歌会では女性の歌が高評価を得、園外から文芸人が訪ねてくれば、女性も参加した。また、沖縄内だけでなく、本土に引き上げた短歌指導者でもあった看護師の仲介で愛楽園入所者11名がアララギに入会し、その中に婦人会会長だった南もいた⁽⁶⁶⁾。また、短歌会のメンバーは不自由者寮の短歌会に合流し、中野菊夫主催の『樹木』に投稿し、愛楽園の文芸は沖縄を超えて園外とつながった⁽⁶⁷⁾。婦人会が会員の要望である美粧院を開店させるのに、この文芸を通したつながりが力を発揮した。文芸を通じてどのようなつながりがあったのかを検討する前に、まず、パーマ機導入を求めて婦人会がどのように動いたかをみたい。『日誌』にはパーマについて次の記述がある。

- 七月八日 文化部長に婦人会の評議員会出席の件を依頼ス
七月九日 庶務部長ヨリ婦人パーマの無断外出の件につき話がアル
七月十日 幹事会を開く (中略)
四、パーマネット機械購入の件に付き。
五、パーマ逃走者に注意事項
七月十三日 評議会に出席 会長副会長

7月8日に依頼した「評議員会出席の件」は、後述するが、7月13日の評議員会に婦人会が参加し、パーマ機購入について説明したいという依頼である。婦人会の美粧院立ち上げにかかわった新垣美登子は、戦後、疎開先の本土から沖縄に引き揚げてきてすぐに美粧院を経営したが、その自伝的小説のなかで、十分な通電もない状態でもパーマをかけに来る人は多く、開店前からお客が待ち、昼食をとる間もない状態で閉店まで立ち働いたと

書いている⁽⁶⁸⁾。婦人会第一回総会で「髪結い」について協議されたように、パーマは愛楽園の女性たちも望み、園から抜け出して園外にパーマをかけに行く女性たちがいた。1950年代代初めの愛楽園では、園外からのクレームもあり、無断外出する「逃走者」が問題になっていた。園職員は「逃走者」を見つけると共愛会に対処を求め、共愛会は懲罰委員会を開いて対応していた⁽⁶⁹⁾。パーマをかけに園外に出て、罰を受けた人がいたと、「外でパーマをかけてきて、髪を切られた人がいたよ」と語る入所者がいる⁽⁷⁰⁾。「逃走者」が出ないよう入所者を統制することを求められていた共愛会は、パーマをかけるために園外に抜け出す女性を問題にして婦人会に統制を求めたと思われる。婦人会はパーマをかけたいという女性の要望の実現と、共愛会を通して要請される「逃走」防止に対応することになった。

評議員が男性ばかりであるため、女性たちは共愛会の議論・決定の場にルートを持たなかった。そのため、婦人会はパーマ機購入を訴えるために評議員会への参加を求め、オブザーバー参加が認められた。7月13日、会長と副会長が評議員会に出席した。南は評議員会で、園内でパーマをかけることを検討し、共愛会でパーマ機を購入することを訴えた。婦人会では7月10日に幹事会を開き、パーマ機購入と「パーマ逃走者への注意」について議論をしていることから、園内でパーマをかけることができればパーマのために園外に逃走する人もいなくなり、パーマ機購入は逃走防止になると訴えたとも考えられる。『日誌』には評議員会での様子は書かれていないが、南の短歌帳に「評議員会に出席して千九百五十一、七、」とタイトルが書かれた歌が書き留められている。

おの^{おの}の論を曲げずに審議する癩院の向上

(65) 参加者の名前から判断したが、園内の投稿では男性が女性の筆名で作品投稿することもあった。

(66) アララギに入会したもう一人の女性、新井節子は1959年に短歌研究推薦賞を受賞した。愛楽園共愛会『愛楽』第15号（沖縄らい予防協会、1959年）。

(67) 前掲、松並一路「あとがき」と『愛楽短歌会ノート』270-276頁。

(68) 前掲、新垣美登子『哀愁の旅』305-317頁。

(69) 共愛会には懲罰委員がいた。「何か問題があると園長が何とかしろと言ってきた。言ってくると、懲罰委員会を開いてどうするか決めた。注意とか始末書ですむ場合もあるし、監禁の場合もある」（2013年12月聞き取り）。

(70) 2015年6月聞き取り。

はかて
企画議会賑はし

おの^{おの}の相^{すがた}あらはし男等の論ずる議題にわ
が思考まとめぬ
オブジャーバーの権利あたへられてわが申べ
るパーマメント機械購入の件を
忍従の生活のみを強いられ来し女の道も放た
れにけり

南が初めて足を踏み入れたであろう評議委員会では、1952年度から本格化していった本建築（ブロック造）工事や病棟建築などの資材費・人件費・輸送費等や予算減などについて審議されていた。男性たちが議論している内容も議論の様子も南に大きな圧として迫ったのだろう。評議員会の議題と議論内容を書きとめようとした南のメモ書きが『日誌』に残されている。初めて経験した男性たちの議論の場で、南はパーマメント機械の購入を訴えた。戦前、「男がもしないことを、お前がするねー」と男性たちから吊し上げを食った南が、共愛会という公式の場で男性たちを前にし、女性自身の意見を表明したのである。南はその高揚感を「忍従の生活のみを強いられ来し女の道も放たれにけり」と記した。しかし、この高揚感は手放しの喜びではなかった。南は次の2首も短歌帳に記している。

女等が何が出来ると男等の言葉に含む侮蔑に
反抗す
妻と女を区別して侮^{けな}す汝^なれよ汝の妻も世の女
なるべし

婦人会長の評議員会への参加は頼んで認めてもらったオブジャーバー参加であり、議論に参加できたわけではなかった。パーマメント機を購入して園内でパーマ作業を行うという美粧院運営の企画に、男性たちは女たちに何が出来るのかと言葉を返してきたのだろう。そこには、かつて自分を吊し上げた男性たちと変わらない姿があった。「女に何が出来る」とけなすことは、自分の妻をけなすことでもあるはずだが、そこを問わない男性の

姿勢に南は批判の目も向けた。

評議委員会での結論がどのようなものだったかは不明だが、そのひと月後、婦人会の美粧院計画は開店へと大きく動き出した。『日誌』には次の記述がある。

八月四日（中略）今晚七時から文芸サロンの文士四人、大城立裕、山田みどり、その他二名の方、又首里青年会の方お二人迎へて愛楽文芸協会とのこんだん会を二時まで交した。

八月二十四日 那覇パーマ組合の一行、新垣ミト、佐久本千代様その他の方々が愛楽園の若い乙女たちにパーマメント機械一台を贈る事に決議したとの新聞記事ニュース。

九月三日 うるま新報社の仲地様みと美粧院の新垣美登様のお二人にお手紙を出す

九月三日 みと美粧院の新垣美登先生、マリ美粧院玉城一枝先生、パリ美粧院呉屋良起先生御一行、パーマ機寄贈の為いろいろ調査並に懇談に御来園

九月四日 パーマ講習に具志さん山城看護婦さんが出張なさる

文芸サロンの人々は愛楽園の文芸同好者を度々訪ねて、夜通し遊ぶこともあったという。『日誌』には8月4日にも夜の7時から2時まで話していたことが記され、短歌や俳句を作り短歌会に参加していた南も文芸サロンの人との集まりに参加した⁽⁷¹⁾。8月4日から9月4日までの『日誌』に書かれた動きについては、うるま新報の記事からも確認できる。『うるま新報』の8月9日の「新世界」欄には「はしけでわたり」と題した、8月4日に文芸サロン同人が愛楽園を訪問したとの記事がある。記事には愛楽園入所者と園外の美術家、音楽家とのかかわりに触れたうえで、「特異なレポートで好評の嘉手刈重実」、「懸賞小説一等の常習、田園文学に秀れた山田みどり」「太宰治を兄貴分に持つ京都市育ちの冬山晃」、「劇界、文学界を通じ

(71) 洋裁講習の件を首里青年社会奉仕部に訴えたのもこの時である。

沖縄前衛派の急先ぼう、大城立裕」の文芸サロンメンバーが泊りがけで愛楽園を訪ねたことが書かれた。また、文芸が盛んな愛楽園では「文芸サロン同人を迎う」と題した俳句、琉歌、詩歌を集めたガリ版刷り冊子が用意されて大歓迎を受け、「心からの交歓」をしたと記された。

その2日後、8月11日の『うるま新報』には「▽…愛楽園入園者の社会への郷愁は濃く とりわけ人生の春をこゝに送る若い娘達の心境は察するに余りある ▽…訪問着の女達を見てかの女達が最も羨やましがるのはパーマネント、園内には機械一つもなく時価二万三千円もする高価にたゞ空しい話題ばかりで開け暮れている ▽…美容院のマダムさん方なんとかなりませんか……」と美粧院関係者に呼びかけた記事がでた。この記事を受けて、8月24日には愛楽園に機械とパーマ技術を提供することが決まったと次の記事が掲載された。

▽……商売柄、これにすっかり同情したのが那覇パーマ組合の新垣みとさん、(ミト美粧院) 佐久本千代さん (パリー美粧院) 玉城一枝さん (マリー美粧院) 等の猛婦連! (これは失礼) …… ▽オトコ気を出して気の毒な彼女らのためにパーマ機械一台を贈呈することに相談一決した ▽……但し今から講習を行って看護婦さんを俄か美容師にするのだ そうな

この時点で、新垣たちは機械贈呈のほかに、園内で継続的にパーマ作業をするために不可欠な美容師を養成することも決めていたのである。南が9月3日に手紙を出したうるま新報の仲地米子は8月4日に訪ねてきた文芸サロンの山田みどりである⁽⁷²⁾。仲地は愛楽園へのパーマ機の寄贈を新聞紙上に取り上げ、また、美容師組合長でもあり、戦後、文壇に戻った新垣美登子とも話を進めたと考えられる。南が仲地と新垣宛に手紙を出した同じ日に、新垣はマリー美粧院の玉城とパリー美粧院の呉屋良起⁽⁷³⁾とともに愛楽園を訪ね、翌日、



開店まもなくのパマミ美粧院スケッチ。
『愛楽誌』1952年4月10日発行の挿絵。

園の看護師2名がパーマ技術講習のために那覇へ出張した。おそらく8月24日から9月3日の間に看護師2名を技術講習のために派遣する段取りがとられていたと考えられる。『愛楽誌』は婦人会が開業したパマミ美粧院の記事の中で新垣について次のように書いている。

新垣美登子女史は人も知る郷土の女流作家であり、沖縄美容師組合の組合長さんであり、近世における女傑である。一日ペンクラブの人たちとともにこの島を訪ね、女はやはり女同志という訳で、静かな場所で婦人団体の女としての苦悩の声を聞かれ、その中にパーマ要望の声があったので早速那覇一流の美粧院に呼びかけ新品のセットを寄贈していただいた訳である。パマミのパはパリー、マはマリー、ミは美登子美粧院のミである。一か月間美登子美粧院において技術の講習を受けてきた看護婦さん二名の指導を受けて、選ばれた三名の病友の美容師が毎晩六時の点燈から十時の消灯まで開業しているのであるが、ワンサワンサの先客万来今や園内の人気を完全に独占してしまっている。

新垣美登子が文芸サロンの人々と一緒に愛楽園

(72) 仲地(後、外間)は後に新聞『沖縄婦人』を発行し、沖縄婦人会連合にかかわった。

(73) 呉屋は1959年に新垣美登子が琉球高等美容専門学校を立ち上げ、校長に就任した時の教頭である。新垣が退任したのちには校長に就任した。前掲、新垣美登子『哀愁の旅』329頁、397頁。

に来たか否かについては、『日誌』やうるま新報の記事からは分からない。しかし、『日誌』の記載からは、新垣たちが機械の導入と技術指導を引き受け、来園して開店までの段取りを立てたことで婦人会の美粧院運営が可能になり、その後も資材や技術指導を続けていたことが分かる。

6. 歓迎と不満のパمام美粧院

『日誌』に記された美粧院開店前後の動きは次の内容である。那覇にパーマ技術を学びに行った看護師二人は9月15日に戻り、婦人会から選ばれた入所者に技術を伝え、美粧院に必要な商品の仕入れ等も任された。婦人会は開店祝いを10月26日に行ったが、その一か月前から準備を始めた。まず、9月25日に幹部会議を招集し、技術担当となる主任1名と助手2名を選んだ。その承諾を共愛会総代から得たのち、10月9日にはパーマ賃金について総代に相談し、10月10日の午前美粧院の備品を共愛会事務所に請求した。同日午後には呉屋良起が内地の知人、パーマ資材を扱う那覇のノビル商会の江崎、技術指導を受けた看護師2名とともに、パーマ機を持って来園した。その際、パーマ機の付属品も寄贈している。翌11日、呉屋はパーマの講習・講義を行い、看護師の髪にパーマをかけて見せた。技術指導を受けてきた看護師2名も入所者にパーマをかけて、「呉屋先生のテスト」にパスした⁽⁷⁴⁾。呉屋はこの後、お客となる「一般婦人に美容のお話」をし、美粧院開店に向けて集客をも支援した。翌12日に婦人会は幹部会を開き「慰労のつもりで一般より先に」パーマをかけるくじ引きをし、幹部会の開店祝いをした。

その後も、婦人会は美粧院に引き込む配電線を工務部に依頼し、10月31日、パーマ代金を女性20円、男性10円、作業員の賃金を主任120円、助手100円に決定し、11月2日、評議員会に出席して美粧院運営の認可を受けた。婦人会の美粧院は婦人会の補助金とは別に、予算をたて収支を決算し

て共愛会の会計監査を受け運営することになった。呉屋はその後も従業員とともに愛楽園を訪ね、技術指導や機材の寄贈をした。呉屋から直接指導を受けた人は次のように語っている⁽⁷⁵⁾。

呉屋（良起）先生という方がいらして、私が一晩で習いました。また私も好きであるから。一晩でね、カットからみんな教わったんですよ。モデルおいといてね、先生が切りなされるのを見とってから、カットから覚えた。先生から直接習ったのは私一人です。

それからまた次にする人がおったから、練習してよって引き継いで。ほかの人に教えて。

婦人会が運営する美粧院はパمام美粧院と名付けられて開店した。園内に開店した美粧院に対する期待は高く、「ワンサワンサの先客万来今や園内の人気を完全に独占してしまっている」と『愛楽誌』に書かれたように、「みんな、かけるかける」とパーマブームになった。婦人会の班長になった女性は、当時のブームを「みんな、かけるかけるして、だから私もかけたよ。私はかけたくなかったんだけど、みんな「かけるかける」するから。私は髪が長かったんだよ」と語った。そして、皆がパーマをかけて写っている集合写真を取り出し、「主婦の友」などの雑誌が送られてくると婦人会役員は「集まれと声がかかって写真を撮った」と写真を見せた⁽⁷⁶⁾。文化部や婦人会に寄贈される女性向けの雑誌は婦人会をとおして一居住区10日間の期限で回覧された⁽⁷⁷⁾。雑誌などが寄贈されると、集められたメンバーは送られてきた雑誌を手にもって撮影し、現像した写真をお礼状に添えた。別の女性入所者も身なりを整えて並んで写っている集合写真を見て、皆がかけたパーマについて語った⁽⁷⁸⁾。

(74) 婦人会日誌には、「呉屋先生のテキストに（中略）パススル」と書かれている。

(75) 前掲、沖縄県ハンセン病証言集編集総務局『沖縄県ハンセン病証言集沖縄愛楽園編』337-338頁。

(76) 2014年3月聞き取り。

(77) 前掲、南真砂子『1951.4婦人会日誌』。また、新垣美登子と親しく、女性運動にもかかわった沖縄の女性医師第1号の千原繁子も婦人会に毎月、雑誌を寄贈していた。沖縄愛楽園文化部『愛楽』第4号（沖縄愛楽園、1956年）34頁。

(78) 2015年6月聞き取り。



1950年代前半のパーマ作業風景。

自分のおしゃれでもあるんだけど。あの頃は米軍の払い下げのやらララ⁽⁷⁹⁾やら、(服は)ごわごわした体に合わないのしかないから、それ直して着けて、そんなばかりだから。柄のものだとか薄手のものとか手に入れて着たいわけ。頭もそう。この写真(婦人会の集合写真)も、みんな髪切ってパーマあててる。これね。不自由舎の人たちの付き添いの人が喜んだの。それまで、女の人たちみんな、かんぼう結い(戦前まで広く行われていた沖縄の女性の髪形)していたの。乙女寮の人たちは不自由者の付き添いするんだけど、それ結わなきゃいけないのが、(パーマをかけると)結わなくてよくなって楽なっただって。

急造のパーマ技術にはトラブルもあった。「だれか頭やけどした人もいたよ。この間も、あれ(やけどしたの)、だれだったかねえ、と話していたよ」と園の思い出話のなかで語られている。また、南は『沖縄県ハンセン病証言集愛楽園編』編纂時の

聞き取りの中で「中の人がかかるパーマは、形が悪いと言っている人がいたよ。初めは本職がやらないさ、見習いがやっているさ。社会⁽⁸⁰⁾でかけるほうがいいといって逃げて。こういうのはたいがい健康な人たち。健康で、外見がどうもない人たち」と語った。このように、美粧院が開店したのちも園の外へパーマをかけに行く「逃走」がなくなることはなかった。しかし、「逃走」する人も美粧院の開店を歓迎した。若くて元気な人は働き手として乙女寮で暮らし、順番で不自由者寮の付き添い作業をした。付き添い作業には不自由者の長い髪を結う仕事もあった。パーマブームの中で、衛生的といわれたパーマ⁽⁸¹⁾は不自由者にも勧められ、髪を短く切ってパーマをあてた。乙女寮の付き添い者たちは「髪をとかすだけでよくなった」と、髪結い作業から解放された。南も不自由者の髪結いについて、「みんな髪結っていたわけさ。不自由舎の髪結いおったよ。みんな奉仕よ。パーマというのができてからが(髪を結わなくなった)。それまではみんな髪結って。束髪といいよったよ。今の若い人が結ってないんだよ。昔はみんな結ってるよ」と語っている。

7. 独立採算の婦人会による美粧院運営

1953年9月15日に制定された『沖縄愛楽園共愛会事務細則』内の「一般細則」ではパーマ作業も理髪作業と同じように作業人員数が定められた。また、「文化部細則」では、婦人会の活動費用は毎月支払われる補助費でまかない、その出納は婦人会に一任されることが定められた。しかし、美粧院については「作業部細則」で「1. 必要な備品は園予算で購入する 2. 油類その他消耗品はパーマ賃金⁽⁸²⁾で購入する 3. パーマ賃金は評議員会が決める 5. 運営は婦人会に一任する 7. 毎月財政監査員の監査を受けなければならない」と定められた⁽⁸³⁾。美粧院では必要な薬剤など

(79) ララは、1946年にアメリカで認可されたアジア救援公認団体が日本向けに援助した物資で、沖縄にも送られた。

(80) 在園者の多くは、園の外を社会と表現している。

(81) 新垣美登子によると、戦前、髪を短くするパーマは衛生的であると肯定的に語られた。戦時下、パーマは欧米的で贅沢なものと否定されたが、戦後になって再び流行した。前掲、新垣美登子『哀愁の旅』284頁。

(82) 日誌の記述に「パーマ賃金並びに作業賃決定」の記述があり、パーマ賃金はパーマ作業者に支払われる作業代ではなく、客が支払う代金と考えられる。

(83) 4.6.は省略。

をパーマ代金の収入で賄わなければならず、また、作業に支払われる賃金は固定され、利用者が増加しても手取り賃金が増えることはなかった⁽⁸⁴⁾。それに対し、共愛会が運営する理髪部については「理髪賃は作業人の手取りとすること」と「一切の備品は園予算で購入すること」が「作業部細則」に定められていた。理髪部を利用する人が支払う代金は作業者の手取りとなり、運営は理髪代金による収入の多寡に左右されなかった。美粧院は理髪部と異なり、婦人会の活動会計とは別に共愛会から独立した事業として認可された⁽⁸⁵⁾。美粧院の開店は売り上げの範囲内で運営する事業として共愛会から認可されたが、これは、理髪店が入所者にとって必需的なものとして位置付けられたのに対して、美粧院は共愛会が責任を持って維持せねばならないものとは考えられていなかったといえる。

戦後の愛楽園は入所者の自治組織である共愛会が壊滅状態の園を復興させ、運営した。そして隔離政策下、入所者の「逃走」などの行動に対する園外からのクレームについて、園長は共愛会に入所者を統制することを求めた。その中で、共愛会は婦人会に女性たちを統制することを求めた。女性たちは共愛会の統制の中にいたが、共愛会の意思決定過程には入っていなかった。そのなかで南は選挙権獲得が婦人会の活動に道を開いたと次のように語っている⁽⁸⁶⁾。

戦後ね、何もかも（なくて）困るさ。洋裁学校が始まったよ。それからパーマヤーがね。…（中略）…いろんなそういうのも団体でないとできないさね。名護の洋裁学校、何順子先生だったかな。これがああいうふうになったのは（実現したのは）、選挙がね。昔は個人個人が札を入れなかったでしょう。今みたいにほら、選挙権が女にはなかったでしょう。女に選挙権ができてからが、いろんな道ができたわけよ。

すでに述べたように、婦人会は女性たちの生活の向上を目指すとともに、それまで南がいう「奉仕」で行っていた事柄を婦人会の事業に位置づけた。また、共愛会の規約における婦人会の位置づけは短歌会や文芸協会、排球クラブと同様の文化活動団体の位置づけであり、敬老会や母の日など文化的なイベントの企画・準備を行った。一方、婦人会の事業の一つである精神病棟の付き添いは患者作業と同様に対価を得ることができたが、その事業は共愛会の規約による患者作業ではカバーしきれない隙間を補う作業だった。これらの婦人会の事業は愛楽園の患者作業構造を下支えした。また、婦人会は園外に「逃走」する女性を統制することも求められた。

それに対して、美粧院の運営は補助費で行う対価が支払われない奉仕としての事業でも、規定の患者作業の隙間を埋める、臨時の患者作業としての事業でもなかった。また、人々の楽しみを企画運営する事業でもなかった。美粧院の運営は装いを楽しまたいという女性たち自身の要望を実現し、継続することを目指した事業だった。

1946年、米軍は諮詢会を廃して沖縄民政府をつくり、「成人教育課」は民主主義、男女平等、女性の地位向上を説き、婦人会結成に力を貸した。それまでの婦人会はお上のいうことに従ってきたが、女性に選挙権が与えられ、自らの行動を自ら決める時代になった。1948年には沖縄婦人連合会が結成され、活動が始まった政党も女性の有権者対策を無視できなくなった。1951年、沖縄では参政権を女性の地位向上の第一歩とし、女性の参政権獲得を記念して婦人週間を設定した。「婦人の自覚を高め生活の合理化をはかりましょう」をスローガンに第1回婦人大会が開かれた。この前年に、愛楽園では婦人会が結成された。

同時期に、愛楽園の文芸同好者が園外の活躍する作家たちとつながり、園内で文芸活動をしていた女性も沖縄内外の作家たちとつながった。そこから、女性運動にかかわっていく人や沖縄の

(84) この後、美粧院での作業のほかに個人営業をする人が出てきたと話す人もいる。

(85) 作業部細則では理髪部に必要な消耗品として洗顔石鹸と薪が共愛会経理部から支給されることになっているのに対して、美粧院では洗顔、洗濯石鹸が経理部から支給されるが、薬剤等は美粧院収入でまかなうことになっている。美粧院は理髪部より薬剤等の経費が必要とされていたと考えられる。

(86) 沖縄県ハンセン症証言集編集総務局2007年3月6日聞き取り。

ファッションリーダーである美容関係者とつながった。愛楽園の女性たちの要望を実現した美粧院運営という婦人会の活動は、逃走防止という入所者統制の側面がありながら、園外の女性運動につながる隔離政策下における女性運動の一面があったといえる。

おわりに

愛楽園の婦人会は1957年度末に解散した。それに伴い美粧院の作業や縫製作業は作業部直轄の患者作業に位置づけられた。対価を得ていた婦人会の作業は共愛会の作業部の所属となり、患者作業

返還運動の流れのなかで職員による作業になった。一方、共愛会が開催する敬老会や区ごとの行事・集まり等の料理作りは変わらず女性たちが担い続け、これらの婦人会が行ってきた事業は続けられた。しかし、共愛会が運営してきた敬老会はその負担の重さから、1964年、施設側に移管され、職員作業へと変更された。

軽快退園の増加等によって患者作業の担い手が減少する時期と婦人会が解散する時期は重なっている。この関係については今後の課題としたい。また、沖縄の女性運動と愛楽園の婦人会とのかかわりについては別稿にゆだねたい。